

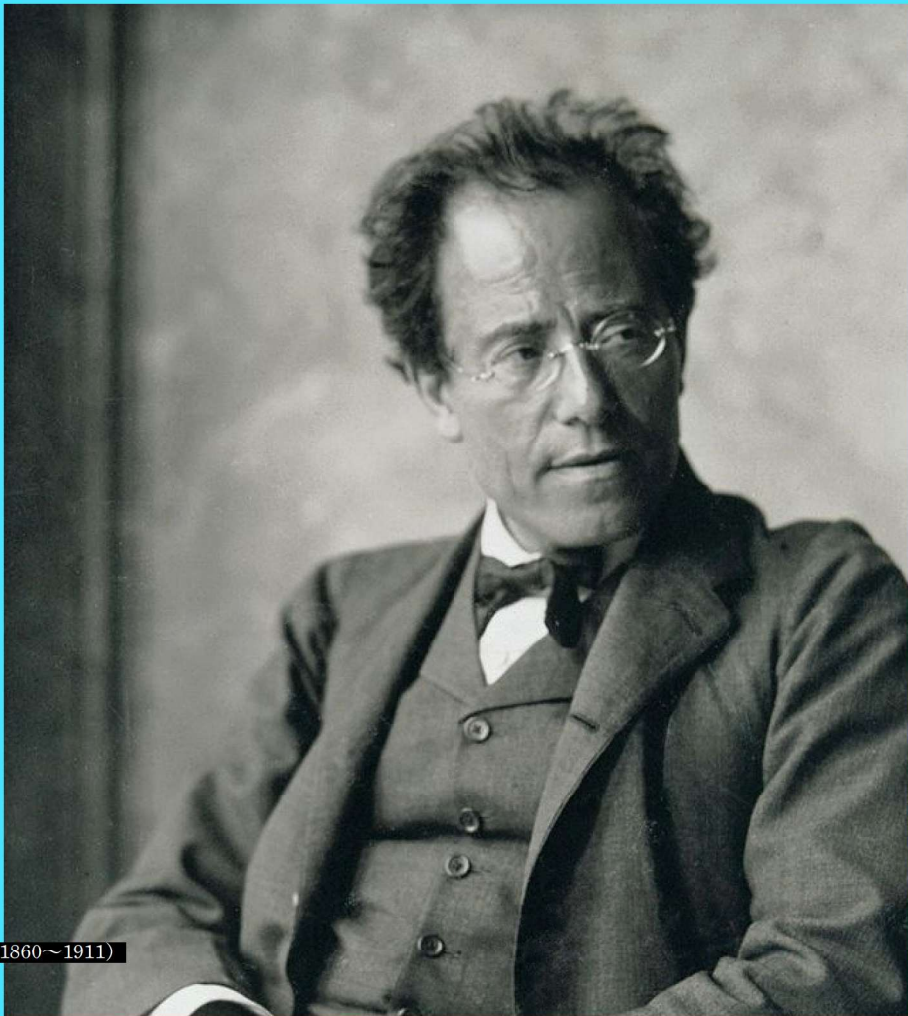
TAKE
FREE

Record Geijustu ONLINE Free Magazine 202511

クラシック音楽メディアのポータルサイト

レコード芸術 The Record Geijutsu ONLINE

FREE MAGAZINE 2025 11



Gustav Mahler (1860~1911)

CONTENTS

- 02 【特報】「レコード芸術ONLINE」創刊から1年、2025年10月からココが変わりました！
- 03 【レコード芸術ONLINE新譜月評】2025年10月の特選タイトル一覧＋批評抜粋
- 06 【レコード芸術ONLINE】2025年9月26日～10月24日更新の記事一覧
- 07 【特別企画】「エヴァンゲリオン」にまつわるクラシック音楽と、そのディスク8選

レコード芸術ONLINEはこちらから→
<https://recoge.ontomo-mag.com/>



制作：「レコード芸術ONLINE」編集部

【特報】「レコード芸術 ONLINE」創刊から 1 年、2025 年 10 月から **ココ** が変わりました！

✓「新譜月評」でダブル評を開始♪

注目盤を中心に、1 つのタイトルを 2 人の筆者が批評します

✓「不滅の名盤」コーナー、始動♪

新旧のクラシック音楽必聴盤ガイド最新版！ 順次公開していきます

✓雑誌『レコード芸術』のバックナンバー電子版が読める♪

2020 年 10 月号～2023 年 7 月号の電子版を、有料会員登録でお読みいただけるようになりました

✓「サポーター」制度をはじめました♪

「レコード芸術 ONLINE」の運営を応援してくださるサポーターを募集いたします

もちろん従来と同じく、**有料会員登録**をいただくと、

新譜月評、特別企画、連載、「レコ芸アーカイブ」、特別講座アーカイブ動画、クラシックデータ資料館などが、読み放題 & 見放題 & 使い放題♪

ぜひ有料会員登録をご検討ください！



<https://recogei.ontomo-mag.com/>

レコード芸術 ONLINE はこちらから♪



<https://www.fujisan.co.jp/membership/recordgeijutsu/>

←の有料会員登録ページはこちらから♪

レコード芸術 ONLINE、フリーマガジン第 3 号です。

掲載記事 1,800 本*突破！ ぜひ有料会員登録をご検討ください♪

レコード芸術 ONLINE フリーマガジンは、2024 年 10 月にオープンした Web サイト「レコード芸術 ONLINE」の編集部がつくる、無料の読みものです。Web サイトでは、休刊となった雑誌「レコード芸術」を引き継ぎ、クラシック音楽の情報や批評をほぼ毎日発信しています。第 3 回の今号には、2025 年 10 月の「新譜月評」特選タイトルの一覧と批評の抜粋、直近 1 ヶ月の記事まとめ、一部の記事を収録しました。音楽を楽しむ時間のおともとして、お役に立てばうれしいです。

ただし、この冊子に載っているのは、Web サイトのごく一部の情報にすぎません。ぜひ、表紙にある QR コードや URL から「レコード芸術 ONLINE」もチェックしてみてください。また本サイトは月額 1,100 円（税込）の有料会員の皆さまに支えられており、クラシック音楽に詳しい執筆陣による、ここでしか読めないコンテンツをたくさんご用意しています。気になった方は、ぜひ登録をご検討ください。

*2024 年 10 月からの累計。新譜月評のディスクページを含む。2025 年 10 月 24 日現在

「レコード芸術 ONLINE」編集部

「レコード芸術 ONLINE」有料会員を大募集中♪

詳細・ご登録は次の QR コード、または URL から▼▼▼▼▼



<https://www.fujisan.co.jp/membership/recordgeijutsu/>

【レコード芸術 ONLINE 新譜月評】2025 年 10 月の特選タイトル一覧＋批評抜粋

※特選＝ダブル評を行ったもので、2 名とも「推薦」評価

※筆者は五十音順に示しています

※特記のないものは通常 CD です

それぞれの批評全文は、有料会員限定コンテンツとして「レコード芸術 ONLINE」上で読みいただけます



https://recogei.ontomo-mag.com/disc_review/backnumber/2025010/



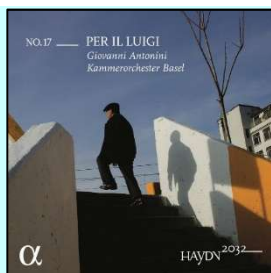
R.シュトラウス：交響詩《英雄の生涯》

沖澤のどか指揮 京都市交響楽団

[デンオン (D) COCQ85636]

一聴して、音の立ち上がりが全体的に「やわらかい」。これは京都市交響楽団と沖澤のどか、新しい組み合わせによる協業作業の最大の特徴なのだろう。オーケストラの現代的な機能性を前面に打ち出すよりも、両者が目指すサウンドの方向性の現れと解釈すべきか（広瀬）

冒頭から京都市響の響きに耳を奪われる。何十年も前から聴いているが、京都市響は本当にすばらしいオーケストラになった。質の高いアンサンブル、温かみがあって美しい音色、迫力たっぷりの最強音から繊細な最弱音まで精緻に描き出す表現力、いずれも非の打ちどころがない（増田）



ハイドン 2032 No.17 「ルイージのために」

ジョヴァンニ・アントニーニ指揮バーゼル室内管弦楽団，ドミトリー・スミルノフ（vn）

[アルファ (D) NYCX10533]

ヴァイオリン協奏曲も含めて、アントニーニの指揮はメリハリのある強弱の変化を推進力のあるビートに乗せて気持ちよいけれども、ここではむしろ、協奏曲を含めて積極的で表情豊かな旋律の歌い口が心に残る（相場）

競合盤に比して最も興味深いのがヴァイオリン協奏曲だろう。ソロのスミルノフはこれまで出版されたエディション（ことによると現存する 18 世紀のマニスクリプト）にあるパッセージを時に変更しているからである（安田）



ベートーヴェン／ピアノ協奏曲全集 Vol.2

菊池洋子（p）山下一史指揮 大阪交響楽団

[キングレコード (D) KICC1632]

ベートーヴェンのピアノ協奏曲のなかでもっとも演奏頻度の低いふたつの作品が収められている。[...] 第 1 番に先行して書かれた第 2 番には、いわば「ベートーヴェン以前」の要素が多分にある。そうであればモーツァルトを得意とするピアニスト菊池洋子の本領が聴かれよう（新野見）

基本的にピアノという楽器で「うたわせる」ことは決して簡単ではないが、菊池がそれをごく自然に、手触りのゴツゴツした箇所も少なくないベートーヴェン作品で成し遂げているところに、アーティストとしての菊池の熟達を感じることができる（広瀬）



バッハとその息子たちによるフルート・ソナタ集

柴田俊幸（トラヴェルソ） アンソニー・ロマニウク（cemb・fp）

[Channel Classics (D) NYCX10540]

柴田とロマニウクの魅力は、高い演奏技術と歴史的な情報に基づきつつ、自由な感性で楽々と時代を超え、現代の聴き手にダイレクトに語り掛けるところにある […] また、彼らの即興演奏は定評のあるところで、当盤でもそれが大いに発揮されている（那須田）

時間をかけて準備されたに違いない演奏者達による創造は、 $a'=402\text{Hz}$ という低いピッチがもたらす沈静な音空間と調和しつつ、作品の枠と内容をより豊かに体験させる。 […] 自然に湧き出てくるプレイ（遊興）、その向かっての自由な精神が脈打っている（美山）



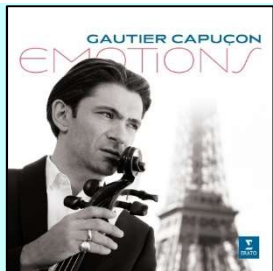
J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲（全曲）BWV.1007～1012 他

酒井淳（vc）

[Acoustic Revive (D) AR1009A-C（3枚組）]

この演奏を聴いてまず心惹かれるのは、酒井が繰り広げるファンタジーの豊かさだ。第1番前奏曲からしてテンポを大きく伸縮させて、個性的な歌を紡いでいく […] 力強く踏み出されるビートやそれをバネとする跳躍などといった舞曲の身体性を、拍の伸縮とともに目に見えるかのように描き出していくのだ（相場）

酒井は […] バロック・チェロ等の研鑽を積み、その後、古楽アンサンブルの通奏低音奏者として活躍している。今回の録音もバロック楽器での演奏でモダン楽器に比べて約全音低いピッチだが、その音色も含めて渋く翳りのある豊かな響きが酒井のじっくりと落ち着いた表現をさらに味わい深いものにしている（草野）



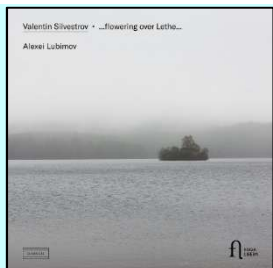
エモーションズ

ゴージェ・カピュソン（vc） ジェローム・デュクロ（p） アドリアン・ペルション指揮パリ室内管弦楽団、パリ・ノートルダム大聖堂聖歌隊

[エラート (D) WPCS28506] SACD ハイブリッド

『エモーションズ』がめでたく国内盤として発売されることを喜ぶたいのは、単に音楽的内容が優れているから、というだけではない。もちろん音だけに集中しても、音楽家たちの意図はたっぴりと伝わるのだが、これはジャケット込みで手に取り、制作の背景まで思いを馳せながら演奏を味わうことで完結するアルバムだから（山野）

「このアルバムで録音した曲をチェロ演奏で聴いてもらいたい」と願っていた作品を集めると同時に、パリへのオマージュとなっている。そのきっかけは 2019 年のノートルダム大聖堂の大規模火災だったようだ […] まず、選曲がいい […] 文字通りジャンルを超えた不滅のメロディを集めたものとなっている（芳岡）



「…レーターに花咲く…」シルヴェストロフ／ピアノ作品集

アレクセイ・リュビモフ（p）

[フーガ・リベラ (D) NYCX10541]

シルヴェストロフはウクライナ出身で 2022 年にドイツへ亡命した作曲家。21 世紀に入ってまもなく書かれた曲を集めたこのアルバムは、青年期の反体制的な創作からも、「新しさ」への強迫観念からも離れた、穏やかな境地を窺わせる（白石）

さりげない作風のなかに、この作曲家の確固とした歴史意識・音楽史観が窺える。リュビモフの洗練を極めたピアノが、それら小さな作品の奥行きを聴かせてくれる。その静謐な響きはまずは単に美しいというべきものだが、そのなかからときに陰りやためらいが生じる（新野見）



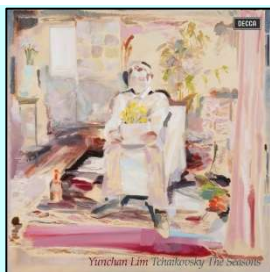
J.S.バッハ／6つのパルティータ

セリーヌ・フリッシュ (p)

[アルファ (D) NYCX10539]

セリーヌ・フリッシュはフランス出身のチェンバリスト […] アルファ・レーベルから数々のディスクをリリースしているが、当盤は《パルティータ》全曲。ミラノのレストッリが1998年に製作した […] クリスティアン・ファーター（1738年製作）の複製を弾いている […] トリノの市立古文書館における録音は、響きが多く華やかな印象を与える（那須田）

まず冒頭から、聴き手にインパクトを与えるのは、残響たっぷりの演奏のライブ感である。彼女の演奏もそのインパクトに負けるどころかそれに後押しを受けて、重厚かつ豪華で非常に聴き応えがある […] 自然で、なおかつひっきりもあり、動きもあり、聴いていて非常に心地よい（鷲野）



チャイコフスキー：四季

イム・ユンチャン (p)

[デッカ (D) UCCD45038]

あきらかに真新しい作品像の提示でありながら、あたかもその曲がもともとからそのように解釈されるのが当然だったかのように聴かせる——それをあっさり実現できるアーティストこそが、他者の追従を許さない類稀な才能の持ち主と言えるだろう。イム・ユンチャンによるチャイコフスキー《四季》は、彼が間違いなくそうした音楽家の1人であることを伝える（飯田）

2004年生まれのピアニスト、イム・ユンチャンは、今回リリースしたチャイコフスキーの《四季》において単にピアノ曲集としてではなく、彼の人生哲学を12の小曲に投影させている。つまり1曲ごとに彼の創作としてのストーリーを展開させていくもので、ブックレットには「人の最後の一年」としての曲の流れを縷々綴っている（草野）



パーセル：歌劇《ディドとエネアス》全曲

マキシム・エメリヤニチェフ指揮イル・ボモ・ドーロ、ジョイス・ディドナート (Ms) マイケル・スパイアーズ (Br) ファトマ・サイド (S)

[Erato (D) 2173228488 (海外盤)]

ロシアが生んだ俊才エメリヤニチェフとピリオド楽器アンサンブル「イル・ボモ・ドーロ」の演奏は、ヘンデルの《テオドーラ》でもそうだったが、現代的な躍動感が特徴だ […] バロック時代に聴衆が感じた鮮烈さをそのまま現代風に再現したという快感がある（小畑）

ドイツ・エッセンにおける2024年2月の演奏会形式オペラ公演のライブ録音。コンサート会場のもつ残響の長さや歌手どうしの距離といった臨場感より […] スタジオ録音に近い仕上がりとなっている […] ジョイス・ディドナートのディドのラメント〈私が土に横たわるとき〉での心理表現は、さすがの一言（河野）

[新譜月評執筆者一覧]

※五十音順、敬称略

相場ひろ 飯田有抄 石原立教 小畑恒夫 岸純信 喜多尾道冬 城所孝吉 草野次郎 河野典子 国土潤一
後藤洋 小宮正安 小室敬幸 鈴木淳史 白石美雪 長木誠司 長井進之介 那須田務 新野見卓也 西村祐
沼野雄司 野平多美 広瀬大介 布施砂丘彦 船木篤也 増田良介 満津岡信育 松平敬 水谷彰良 美山良夫
八木宏之 矢澤孝樹 安田和信 谷戸基岩 山崎浩太郎 山野雄大 山之内正 芳岡正樹 鷲野彰子

【レコード芸術 ONLINE】2025 年 9 月 26 日～10 月 24 日更新の記事一覧

※有料会員限定コンテンツを含みます

注目記事

- [芸術の秋、マーラーの秋] マーラー“旬”の話題を追う 交響曲全集、ピリオド楽器、室内アンサンブル版 etc. | 鈴木淳史
- [芸術の秋、マーラーの秋] マーラーぎらいのための「再」入門ディスク 10+1 | 広瀬大介
- [芸術の秋、マーラーの秋] 名歌手で辿るマーラー録音史ー《大地の歌》を起点に | 吉田真
- [芸術の秋、マーラーの秋] ラトルの切り札、《悲劇的》4 種の録音終楽章の聴き比べで判るその「思惑」 | 城所孝吉
- [芸術の秋、マーラーの秋] 日本のオーケストラとマーラー録音の歩み | 増田良介
- [芸術の秋、マーラーの秋] 楽譜から読み解くバーンスタインのマーラー 前篇：交響曲第 2 番《復活》第 5 楽章 | 石原勇太郎
- [芸術の秋、マーラーの秋] 楽譜から読み解くバーンスタインのマーラー 後篇：交響曲第 9 番第 4 楽章 | 石原勇太郎

[お知らせ] 【特報】創刊から 1 年、2025 年 10 月からココが変わる！【動画あります】

[お知らせ] 新譜月評リニューアルのお知らせ

[お知らせ] クラシック音楽 海外盤リリース情報 (2025 年 10 月)

[お知らせ] フリーマガジン第 2 号配布開始！

[お知らせ] 【読者アンケート第 9 弾】私の「マーラーの銘盤・愛聴盤」大募集！

[お知らせ] 【2025 年 11 月リリース予定】クラシック音楽新譜 発売情報

[2025 年 10 月新譜月評] オーケストラ曲, 室内楽／器楽曲, 鍵盤曲, オペラ／声楽曲, 音楽史, 現代曲／ポスト・クラシカル

[最新盤レビュー] リイシュー & BOX 注目盤 (9 月) | 編集部

[最新盤レビュー] これぞ、小澤征爾。SACD で音質一新した究極の 7 枚 | 増田良介

[最新盤レビュー] クナッパーツブッシュからアバドまで ウィーン国立歌劇場 “栄光の”名演奏、名舞台を総覧 | 小宮正安

[最新盤レビュー] テリー・ライリーの音楽を堪能するボックスセット | 小寺未知留

[インタビュー] 山田和樹＝モンテカルロ・フィルが意欲的な新録音を 3 点発売！ | 山野雄大

[インタビュー] 鍵盤プレイヤー、アンソニー・ロマニウク 冒険心尽きざる鬼才のリアルを聞く | 伊熊よし子

[インタビュー] 小山実稚恵に聞いた、最新小品集『アルバム』そしてデビュー 40 周年の「もどかしさ」のこと | 那須田務

[インタビュー] トーマス・エンコ『モーツァルト・パラドックス』 仏ジャズ界の寵児による“新しい”モーツァルト | 東端哲也

[インタビュー] ヨーヨー・マ、『ベートーヴェン・フォー・スリー』そして音楽を通じた未来への希望について語る | 山野雄大

[ショパン・コンクール] ショパンのピアノ協奏曲は 作曲家の「リアル」とは違っている？ | 小岩信治

[特別インタビュー] ジャン＝ギアン・ケラス バッハ《無伴奏チェロ組曲》との歩みを込めた CD アルバムと本について | 山崎浩太郎

[特別企画] 「エヴァンゲリオン」にまつわるクラシック音楽と、そのディスク 8 選 | 編集部 **※次ページに掲載！**

[特別企画] アクセスランキング『レコード芸術 ONLINE』2025 年 7 月～9 月 | 編集部

[特別企画] レコードならではのオペラ全曲盤の“妄想人事異動” | 編集部

[特別企画] 編集部員のひとりごと # 1 | 編集部

[連載] プレリューディウム 第 13 回 「生ぬるさは一切存在しえせん」 | 船木篤也

[連載] トーキョー・モデュレーション 第 13 回 彼女はジャンルを愛し、そして憎む | 沼野雄司

[連載] 音符の向こう側 第 13 回 シューベルトの音楽における「自然」 | 城所孝吉

[連載] 週刊フィッシャー＝ディースカウ Nr.32～36 | 吉田真

[レコ芸アーカイブ] アメリカのバイタリティ (『欧米の音と生活』④) | 若林駿介

[レコ芸フォト・アーカイブ] 『レコ芸』が目撃した名演奏家たち【第 13 回】1974 年 7 月～12 月 | 芳岡正樹

[レコ芸アーカイブ] 新・レコードつれづれぐさ 第十三回 (1984 年 7 月号) シェーンベルクの声楽作品 | 柴田南雄

[レコ芸アーカイブ・特捜プロジェクト] シマノフスキ, カロル Szymanowski, Karol (1882～1937) | 川田朔也

[レコ芸アーカイブ・特捜プロジェクト] グェルニエリ, カマルゴ Guarnieri, Camargo (1907～93) | 濱田滋郎

【特別企画】「エヴァンゲリオン」にまつわるクラシック音楽と、そのディスク 8 選

※2025 年 9 月 30 日更新の無料公開記事から、関連情報欄を除く、ほぼすべてを転載しています

Text：編集部（H.H.）

庵野秀明が監督を務めたテレビアニメ版『新世紀エヴァンゲリオン』の放映開始（1995 年 10 月 4 日）から、2025 年 10 月で 30 年を数えます。

エヴァの舞台は、大災害「セカンドインパクト」を経て荒廃した 2015 年の地球。謎の生命体「使徒」との戦闘のために、生き残った人類が人造人間「エヴァンゲリオン」を開発。エヴァンゲリオンには魂が宿っており、なかにはその魂と血縁関係にあるパイロットが搭乗する機体もあります。そのパイロットの 1 人で主人公、碇シンジを軸に物語が展開されていきます。キリスト教的終末観やメカ・アニメの要素などをないまぜに、思春期の葛藤を含む複雑な心理描写や哲学的テーマを描いた独特の世界観で知られ、国内外に根強いファンを多く生んだ大人気アニメーション作品です。

2021 年に『シン・エヴァンゲリオン劇場版 :||』で完結するまで、断続的に四半世紀を要したほど長大な、このプロジェクトの随所には、クラシック音楽が登場していました。そこで今回は、TV シリーズ～旧劇場版に登場する主なクラシック音楽作品を、最近の注目盤をまじえつつ、編集部員がご紹介します。



①



②



③



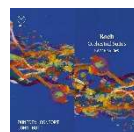
④



⑤



⑥



⑦



⑧

①J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 BWV1007～1012（全曲）

アナスタシア・コベキナ（vc）

〔ソニー・クラシカル（D）SICC30927（2 枚組）〕

TV シリーズの第 15 話「嘘と沈黙」に、主人公の碇シンジが J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》第 1 番を演奏する場面がある。シンジは 5 歳で始めたチェロを「やめる理由がなかった」といって続け、ときどき 1 人で弾いているようだ。彼は、庵野秀明をはじめとする『エヴァンゲリオン』制作陣や視聴者を投影した「分身」ともいわれ、物語では他者との関係をうまく築けず、殻にこもりがちな性格として描かれる。ここに紹介するのはビッグネームとの共演を重ね、年々人気を博しているコベキナによる全曲録音。複数のチェロを、曲ごとに選びとって独奏に臨んでいる。

②ヘンデル：メサイア（全曲）

ジョン・ネルソン指揮イングリッシュ・コンサート、イングリッシュ・コンサート合唱団、他

〔エラート（D）5419774160（2CD+1DVD）〕

第 22 話「せめて、人間らしく」には、エヴァのパイロットで主要登場人物のひとり、惣流・アスカ・ラングレーがエヴァ式号機での戦闘の果てに、第 15 使徒アラエルから精神攻撃を受ける場面がある。ここで《メサイア》のハレルヤ・コーラスが流される。過酷な運命を乗り越えるべく「人間らしく」あろうと必死な彼女を、神の視点で裁くかのように「ハレルヤ（主を讃えよ）」が響き渡る、というトラウマ量産シーンである。一方で、ここに紹介するネルソン指揮イングリッシュ・コンサートによるピリオド演奏では、人間による神への賛美が、透き通るようなサウンドで表現されている。

③ベートーヴェン：交響曲第 9 番《合唱》

ヤン・ヴィレム・デ・フリーント指揮読売日本交響楽団、新国立劇場合唱団、他

〔エクストン（D）OVCL00844〕

攻撃を受けたアスカは心を深く傷つけられ、戦闘不能の状態に陥る。同じくエヴァのパイロットである綾波レイも、自らの命を引き換えにして使徒を道連れにする。シンジも精神的に大きな傷を負ってしまう。

こうして迎えた TV シリーズのクライマックス、第 24 話「最後のシ者」にはシンジの最大の理解者で、正体は第 17 使徒、渚カヲルが登場する。第九を鼻歌まじりに歩み寄りながら…。カヲルを含めた使徒たちが、勧善懲悪的な「悪」ではないことが示唆される重要回である。紹介するディスクはデ・フリーントの読響ライブ。モダン・オケをピリオド奏法でエネルギーに駆動させた話題盤だ。カヲルは音楽を「リリンの生み出した文化の極み」と語ったけれど、この第九はどうだろう？

④ヴェルディ：レクイエム

ジャンアンドレア・ノセダ指揮ロンドン交響楽団、同合唱団、他

〔LSO Live（D）LSO0800（海外盤）〕

TV シリーズで一応の完結をみたエヴァは、その観念的すぎる第 25 話と最終話について、制作陣が大きな批判を浴びることになった。ならばやり直そうと作られたのが劇場版である。1997 年 3 月に『シト新生』が公開。TV シリーズの第 1 話～第 24 話の再構成「DEATH」篇と、第 25 話の異稿版「REBIRTH」篇からなる構成だった。

『シト新生』劇場予告編には 2 つのヴァージョンがあり、一方にはベートーヴェンの第九から第 4 楽章の冒頭、もう一方にはヴェルディの〈怒りの日〉が使用された。ノセダ指揮ロンドン響のアートワークを見て、あの予告編を思い出したのは編集部員だけではないはず。

⑤パッヘルベル／チェロ・コンソートによるマニフィカト＝フーガ

スペース・タイム・コンティヌオ

[Analekta (D) AN28911 (海外盤)]

『シト新生』の「DEATH」はTVシリーズの単純な要約ではない。時系列はバラバラだし、本編のできごとより以前（おそらく18ヶ月前とされる時期）の設定で、シンジ、アスカ、レイ、カナルと思しき4人の中学生が弦楽四重奏でパッヘルベルの《カノン》を演奏するシーンが折々に挿入される。それぞれの担当楽器はチェロ、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、第1ヴァイオリンだ。本編ではありえない取り合わせだけに胸を打つ。ちなみに、現実目を見れば実は弦楽四重奏版の《カノン》はほとんどリリースされていない。この盤はスペース・タイム・コンティヌオによるもので、古楽器の「チェロのようなもの」の合奏版を収めている。

⑥エヴァンゲリオン交響楽

鷺巣詩郎（芸術監督）、デリック・イノウエ指揮新日本フィルハーモニー交響楽団、他

[スターチャイルド (D) KICA390 (2枚組)]

『シト新生』は未完だった。具体的には「REBIRTH」が制作途上で、TVシリーズ第25話の部分までしかなかったのだ。その第2稿にあたる内容が、同年7月に『Air／まごころを、君に』として劇場公開され、エヴァはついに完結を迎えることとなった。

その封切りの直前に、コンサート「エヴァンゲリオン交響楽」が催された。芸術監督を務めた鷺巣詩郎は庵野作品の常連作曲家で、『ふしぎの国のナディア』から『シン・ウルトラマン』まで、さまざまな作品でコラボレーションを行ってきた。コンサートではヤシマ作戦のBGMとして知られる、冒頭のティンパニが印象的な《DECISIVE BATTLE》などの自作曲にまじえて、第九や《メサイア》が演奏され、パッヘルベルのカノンとラップを合わせるなど、ジャンルの枠を超えたアレンジが試みられている。

⑦J.S.バッハ：管弦楽組曲 BWV 1066～99（全曲）

ジョン・バット指揮ダニーデン・コンソート

[Linn Records (D) CKD666 (2枚組, 海外盤)]

『Air／まごころを、君に』は「Air」「まごころを、君に」の2章構成となっている。秘密結社ゼーレや、シンジの父である碇ゲンドウの隠された意図、さらに使徒の正体など、エヴァの深層が明かされつつ、物語の終わりへ向かっていく。

その前半「Air」に、J.S.バッハの管弦楽組曲第3番の第2曲〈エール（エア）〉が登場する。廃人状態だったアスカがエヴァ式号機に乗り、ゼーレが放った量産型エヴァと死闘を繰り広げるシーンでのことだ。《メサイア》の項でトラウマ量産シーンと書いたが、ここはそれを凌ぐ衝撃的な描写で、直視に堪えない。とはいえ、この耽美にも思える破壊描写は、アニメ史に残る名場面として重要だとも思う。ここに挙げたのは切り詰めた解釈が特徴の、ジョン・バット指揮ダニーデン・コンソートの全曲録音。LINNレーベルならではの高音質も相まって、生々しい〈エール〉を聴くことができる。

⑧HUMAN UNIVERSE（通常盤/北極星ヴァージョン）

角野隼斗（p）

[ソニー・クラシカル (D) SICC30898]

『Air／まごころを、君に』の後半「まごころを、君に」、さらに旧劇場版までのエヴァ全体を総括するのが、マイラ・ヘス編曲によるピアノ独奏版の〈主よ、人の望みの喜びよ〉である。ここに紹介するのは、2024年にリリースされて話題となった、YouTuberとしても活躍する角野隼斗の盤だ。

旧劇場版のラストで、庵野は観客に向けて「現実へ帰れ」というメッセージを突きつけた。このことには多様な解釈が生まれているけれど、編集子は、あれは庵野の切なる祈りだったと考えている。自己の内外にとって、あまりにも巨大になってしまった“エヴァ”から、一刻も早く解放されたいという願望がにじんでいたのではないか。ラスト直前、突如として実写映像が挿入される。雑踏のイメージカット、スクリーンから見た映画館の観客（こちらにカメラを向ける、冒頭のコベキナ盤のジャケ写じゃないけれど、第四の壁の破壊ともいえるかもしれない）、そして庵野に届いた脅迫メールの画面。その背景で〈主よ〉は静かに流れるのだ。

庵野は後年、エヴァに戻ってきて、新劇場版の制作に乗り出した。そして〈主よ〉が再び登場することになる。今度は、現実/虚構の二項対立を乗り越えようとする、新しい目的をともなう。

【「レコード芸術 ONLINE フリーマガジン」についてのお問い合わせ】

(株)音楽之友社「レコード芸術 ONLINE」編集部

〒162-8716 東京都新宿区神楽坂 6-30

E-mail: reco_online@ongakunotomo.co.jp

※本誌は、2025年10月24日現在の情報に基づきます

【レコード芸術 ONLINE 公式 SNS のご案内】

記事の更新情報などを発信しています♪

また、お読みになったご感想を、#レコード芸術 ONLINE を添えてぜひご投稿ください！

